

Norman Conquest と フランス語流入との時間差について*

秋 山 庵 然

1. 英語は夥しい数の借用語を含んでいる。なかでもフランス語からの借用語が多い。それも1066年の Norman Conquest 以後の一時期においてその借用が著しい。これは明らかにこの歴史的事実と関係がある。

Jespersen, Koszul, Mossé, Baugh などの学者はフランス語からの借用語数を時代的に50年ごとに区切って調査した。彼らはそれぞれ異った方法で、その借用語がいつ初めて英語の文献にあらわれたかを *Oxford English Dictionary (OED)* について調査した。調査方法は、Jespersen が OED の A-I までの最初の100語、それに J と L の最初の50語を¹⁾、Koszul は M 以降を同じ方法で²⁾、Mossé は A 全部について³⁾、Baugh は -20, -40, . . . -80, -100 ページごとに総計1000語までを A-Z を通して調査した⁴⁾。Figure 1 はそれらの調査結果である。わかりやすくするためにそれらを折れ線グラフにしたのが Figure 2 である。

2. 50年ごとの借用語数の増減が四つの調査ともほぼ一致している。1201—1205頃より増加し始めて、1351—1400にその数が最大となり、以後減少するというカーブは、多少のデコボコの相異はあっても、同じ変化を示すものと見ていいであろう。

しかし、この結果からただちに「言語への影響は Norman Conquest のあと、急には表われなかった。その影響は1251—1400で一番強くあらわれた。」⁵⁾とか「フランス語の単語が英語に最も多く流入した時期は1250年から1400年にわたる 150年の期間であった」⁶⁾と、断言できないのではないか。

注意しなければならないのは、この時代別借用頻度調査はすべて OED に基づいているということである。ということは、その語いが OED を編集する際に資料となった文献 (“A List of Books quoted in the Oxford English Dictionary” に列挙してある 2 万数千の文献) に現われていなければ問題とならないのである。かつ、文献に現われた年代が記載されていることも、当然のことながら、注意しなくてはならない。逆に言えば、あるフランス語の語いが早くから取り入れられ頻繁に使用

The Influx of French Words in Chronological Order
Based on the O E D

	Jespersen	Koszul	Mossé	Baugh	I+K+M+B
Before 1050	2	0	0	2	4
1051-1100	2	1	2	0	5
1101-1150	1	2	1	2	6
1151-1200	15	11	5	7	38
1201-1250	64	39	58	35	196
1251-1300	127	122	105	99	453
1301-1350	120	118	169	108	515
1351-1400	180	164	291	198	833
1401-1450	70	69	104	74	317
1451-1500	76	68	166	90	400
1501-1550	84	80	155	62	381
1551-1600	91	89	158	95	433
1601-1650	69	63	180	61	373
1651-1700	34	48	78	37	197
1701-1750	24	32	43	33	132
1751-1800	16	33	52	26	127
1801-1850	23	35	68	46	172
1851-1900	2	14	68	25	109

Figure 1.

されていたとしても、それが上記のリストにある文献に載っていないならば、この調査では数えられないのである。

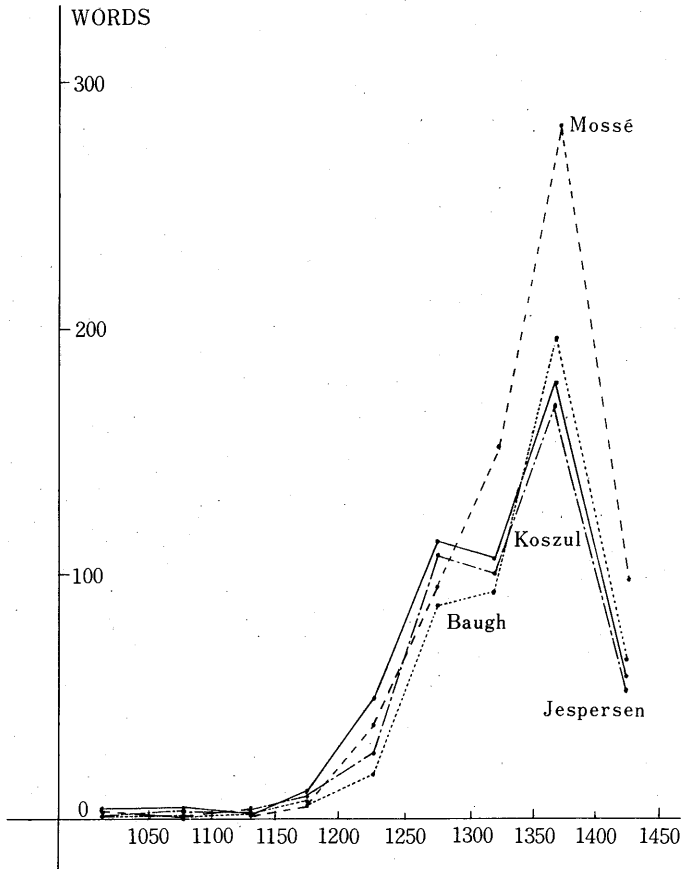


Figure 2.

3. そこで、本稿では“*A List of Books Quoted in the Oxford English Dictionary*”にある文献の出版年代を調査してみた。今回は2万数千のすべてを調査することができず、上記の時代別借用頻度のグラフが下降を始める1450年までに出版されたものを、同じく50年ごとに区切って時代別に分類して数えた。結果は Figure 3 のようになる。この list にある2万数千冊のうち1450年までに発行されたものは割合に少なく、全部で503冊であった。A欄の数字ははっきりといづれかの50年間に分類できるものであり、B欄の数字は発行年が *a* (=ante) や *c* (=circa) がついていて、100年単位でしか分類できないものである。ここでは便宜的にこれらの数を二等分して前後の50年に加えた。C欄はその数を示している。

	A	B	C
701-750	1	0	1
751-800	0		0
801-850	2	0	2
851-900	12		12
901-950	1	0	1
951-1000	38		38
1001-1050	3	0	3
1051-1100	1		1
1101-1150	9	5	11.5
1151-1200	7		9.5
1201-1250	22	7	25.5
1251-1300	43		46.5
1301-1350	50	25	62.5
1351-1400	112		124.5
1401-1450	136	29	150.5
1451-1500			

Figure 3.

4, さて3の結果(グラフ[A])と2で述べた Jespersen, Koszul, Mossé, Baugh らによる調査結果の合計数(グラフ[B])を同じグラフで対比させたものが Figure 4 である。(ここでは1066年以降の変化を調べているのであるから、1050-1100からのものに限った。)ここでわれわれは余りに類似したカーブを得ることになった。1401-1450になって、[B]が下降線となるのに対して[A]が増加を示すのは当然のことである。調査してないところであるが、[A]は1450年以降も増加線を描くことは容易に想像がつく。

この対比からわかるように、OED に基づいた時代別借用頻度調査は、そのOED

の基礎になっている文献の時代別発行数と多いに関係があると断定できる。つまり1066年当時もっと多くの本が出版されていれば（そしてそれらの本が *OED* の資料となっていれば）、当然借用年代が全体に早くなっているはずである。さらに言えばかなり早くからイギリス人はフランス語の語いを借用していたのだが、それを示す「12世紀の文献が極めて少なかったので、おそらくその前にあったと思われる単語を、あとの世紀に所属させることもあるに違いない。」⁷⁾ Figure 4 で言えば、グラフ [A] のカーブが左に寄れば、グラフ [B] のカーブも左に寄ったものとなったことは確かであろう。

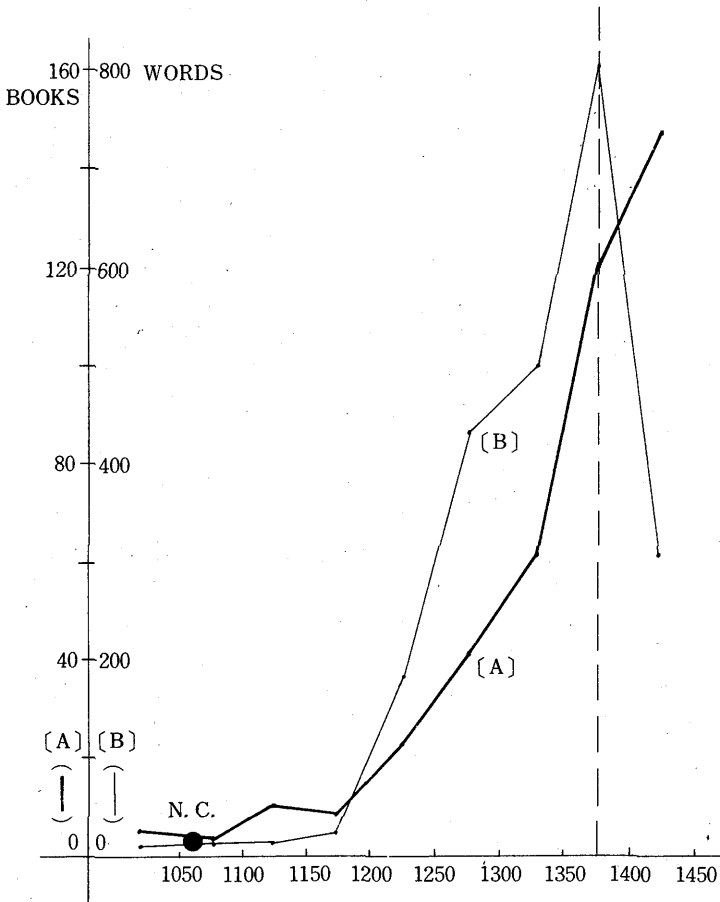


Figure 4.

5. 一般にある社会的・歴史的事実とそれに伴う言語変化については、言語への影響は「かなり時間的におくれて」やってくることになっている。そして、ここで述べた歴史的事実—Norman Conquest—とそれ以後の英語へのフランス語からの借用語の流入の時代的变化がよくその例として挙げられ、「侵略によっても、フランス語の英語への影響（本稿の場合は語いについてだけしか言えないが）は直ちにではなく、ゆっくりとあらわれ、およそ 300年程後になってその影響が極値に達した」というふうに簡単に言われてしまう。このような説明は実に誤解を生みやすく、これを例に挙げるときには前述の四人の学者の調査の方法とその結果の意味を充分に考える必要がある。

さらに繰り返して言うならば、当初の影響は上流階級の用語においてであり、「身分低き者でフランス語を解する者は百人の中に一人もなかった⁸⁾」と言っても、「フランス語の単語が英語に最も多く流入した時期は1250年から1400年にわたる 150年の期間」よりは早い時期であったと考えてもいいのではないか。前述の四人の学者の調査により1200—1400間に「借用された」と数えられている語もそのずっと以前から、話し言葉として日常使われていたと考えてもいいであろう。

本稿では、その調査資料を提供している資料そのものの数が当時きわめて少なく、その数と調査結果の数とがだいたい比例していることが確かめられた。このことは（当然のことながら予想されてきた）「借用されたのは調査の結果、分類されている年代よりもかなり早い時期であったのであろう」という推論の傍証の一つになると思われる。

Notes:

*This is a revised version of a part of my thesis (Unpublished MA thesis, January 1972)

1. O. Jespersen, *Growth and Structure of the English Language* (Leipzig, 1926), pp. 86-7.
2. A. Koszul, *Bulletin de la Faculté des Lettres de Strasbourg* (1937) (T. Nakao, "History of English II," *Outline of English Linguistics* Vol. 9., pp. 425-7.).
3. F. Mossé, *Esquisse d'une Histoire de la Langue Anglaise* (trans. T. Gunshi & H. Okada, pp. 89-90.).
4. A. C. Baugh, *A History of the English Language* (New York, 1935), p. 214.
5. Jespersen, *op. cit.*, p. 87.

6. J. C. McLaughlin, *Aspects of the History of English* (1937), p. 50.
And see also, G. L. Brook, *A History of the English Language*
(London, 1968) p. 47., R. D. Stevick, *English and Its History*
(Boston, 1968) p. 237., H. Hirooka, *A Historical Survey of the
Language of the English People* (Tokyo, 1963) p. 161.
7. Mossé, *op. cit.*, pp. 84-5.
8. Lewede men cune Frensch,
Among an hondrydþvne is on.
—*The Romance of Richard the Lion-hearted*, 23-4.